

橋	橋	川	小	西	橋	大	登場人物表
口	口	口	関	垣	口	住	
敏	麻	大	奈	一		朋	
行	子	輔	々	士	雪	樹	
(((((((
5	4	2	2	3	2	2	
0	5	0	0	6	0	0	
)))))))	
雪	雪	朋	雪	大	朋	大	
の	の	樹	の	学	樹	学	
父	母	の	友	教	の	二	
親	親	友	人	授	彼	年	
		人			女	生	

あらすじ
大学二年生の大住朋樹の恋人、橋口雪はあ
る日不治の病にかかると責任の重さに一度は
逃げ出す朋樹だが、周囲に支えられ雪を最期
まで看取ることを決意する。死去する直前、
雪は朋樹に三つの遺言を残した。
一つ目は、雪の生まれ育った町の海に、彼
女の遺骨を流すこと。遺言通り、朋樹は海に
遺骨を流す。二つ目は遺骨を砕いて指輪を作り、それを
朋樹の右薬指にはめてほしいというもの。橋
口雪という人間がこの世から消えても形があ
れば忘れることはない、思い出ると共に未来を
過ごせるのではないかと思っていたのだった。
雪を愛しているなら、四年後に遺骨の指輪を
左の薬指にはめ直して欲しいと雪は言った。
四年後も愛が続いているなら、結婚しよう
と。ただし結婚は一年に一日だけ、約束を交
わした。た。だ。し。結。婚。は。一。年。に。一。日。だ。け。、
1

う 日付の日だけという条件で。それ以外の三
百六十四日は朋樹の自由に過ぎ、彼女を作
つてもいい。
十年後の同じ日、朋樹は雪の生まれた町を
訪れていた。左手薬指には雪の遺骨で作った
指輪。
朋樹は雪の幻影に、現在付き合っている彼
女がいてその人との結婚を考えていることを
告げる。だけど雪を忘れたわけではない、別
の人と結婚するが○月○日だけは来年からも
ずっと雪に会いに来る、その日だけは雪の夫
として一年に一日だけ雪を想って生きていく。
そう決意した朋樹は「また来年」と言い残
し、雪の生まれ育った町を後にするのだった。

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

下手側に病室。雪、奈々、大輔がいるが照明暗くてよく見えない。上手から走って来る朋樹。ドアの前で立ち止り、服の水を払う。朋樹「電話に気づくのが遅れた、だから駆けつけるのが遅れてしまった。彼氏失格だな、なんて呑気なことを考えながら病室の扉を開けた」

ドアを開けて中に入ると同時、下手側の照明明るく。ベッドの上に雪、その周りを囲むように奈々、大輔がいる。

大輔「何してたんだよ、朋樹！ 彼氏だろ」

朋樹「あ、えっと……」

雪「傘、差さずに来たの？」

朋樹「急いでたから」

奈々「ここら、大住くん。こういう時は、雪に会いたくて傘差す時間すら惜しかった」

朋樹 「希望の物語」

雪 「強い絆で結ばれた恋人たちの」

朋樹 「それを模索した僕たちの」

と、ともに生きる方法はある」

雪 「生死が私達を引き離したとしてもきつむため」

朋樹 「彼女が存在していた証をこの世界に刻

雪 「私が生きていたという証拠の」

朋樹 「彼女の遺言の名前」

雪 「骨刻へこつこく、それが」

朋樹 「君が生きていたという証を」

雪 「あなたの心に、身体に、指に、骨に」

朋樹 「雪、俺は」

んでくれる？」

雪 「ねえ、朋樹。私が生きたという証を刻

照明、薄暗く。

朋樹 「：：ただいま、雪」

雪 「ふふっ。おかえり、朋樹」

朋樹 「あっ、いや：：」

朋樹 「そこが一番近いし質もいいって、哲学
 雪 「その言葉聞くの五回目、商店街の八百
 朋樹 「お見舞いといえぱりんごかな、って」
 朋樹 「お見舞いといえぱりんごかな、って」
 雪 「朋樹、りんごって言っちゃってる」
 朋樹 「隠してない！りんごなんて持ってき
 雪 「いま、なにか隠した？」
 朋樹 「じゃあ、遠慮なく：：」
 朋樹 「の部屋私しかいないから」
 雪 「へ少し驚いてから」大丈夫大丈夫、こ
 朋樹 「失礼しまー：：ノックしてなかつた」
 紙袋を持った朋樹、ドアの前に立つ。
 ベッドにいる雪、本を読んでいる。

朋 樹 「かも日 は朝一で来た りんごを持ってくる
 雪 「朝一でお見舞いに来てくれた人が、今
 朋 樹 「もらった？」
 雪 「うん、もらったの」
 朋 樹 「俺には全部同じに見えるけど。へ机の上のフルーツナイフに気づいて」ナイフ
 雪 「全然違うよ、朋樹のりんごが一番おいしい」
 朋 樹 「同じりんごじゃん」
 雪 「剥いて？ 朋樹の持ってきてくれたり
 朋 樹 「彼氏なのに平凡な物でごめんなさい」
 人 もみーんなりんご」
 に聞かれたって奈々が。大輔くんや他の
 雪 「りんご祭りでもあるのって八百屋さん
 で？」
 の講義中に西垣が：：他のやつらもそこ

朋 樹 「三時四十五分」
 雪 「それは朋樹が真面目に講義聞いてない
 朋 樹 「出来ないことの方が多いいよ、成績だ
 雪 「りんごを眺めながら」朋樹ってなんで
 朋 樹 「冗談だったの？」
 雪 「えっ、すごい！わあ！うさぎの形
 朋 樹 「うさぎ型のリんごの向きを変えたり工夫し
 雪 「皮が耳になるやつ。あれの形にして」
 朋 樹 「うさぎ？」
 雪 「あ、うさぎさんがいい」
 朋 樹 「いいけどさ、それくらい」
 雪 「ないから、朋樹が一番乗り」
 朋 樹 「のナイフ使っていいよ。まだ誰も使って
 雪 「朝弱いからなあ、朋樹は。じゃあ、そ

朋樹 「お母さ：：お、おばさんこそ」
 麻子 「朋樹くん。今日も来てくれたのね」
 母、麻子が歩いてくる。
 朋樹と反対（上手方向）方向から雪の
 ドアを開け、病室から廊下に行く朋樹。
 朋樹 「はいはい、また後で」
 絶対寝ないでね！」
 雪 「一番前の席で居眠りとかありえない！」
 朋樹 「努力はする、一番前の席に座って頑張
 雪 「寝ないでね？」
 てくる」
 義終わったらまた来るよ、ノートもとつ
 朋樹 「大好きな西垣先生の講義だもんな。講
 雪 「ダメ！哲学はサボっちゃダメ！」
 朋樹 「さぼっちゃおうか？」
 雪 「いつちやう？」
 朋樹 「基礎哲学」
 でしよ？」
 雪 「もうすぐ四時だ。朋樹、四限入ってる

雪 「お見舞いに来てくれたの」
 麻子 「今そこで会ったわよ」
 雪 「もう、お母さん！」
 麻子 「ただいま！：：ノックしてなかった」
 麻子、ドアを開けて病室に入る。
 上手側の照明消える。
 朋樹、走って上手側に去る。
 ます！」
 朋樹 「そうだった！すみません、もう行き
 でもないわ、それより時間大丈夫？」
 麻子 「あら、もしかして聞いてない：：なん
 朋樹 「ナイフのお礼？」
 麻子 「ああ、哲学ね。ナイフのお礼言ってお
 朋樹 「哲学の講義があるの？」
 麻子 「もう帰るの？」
 朋樹 「すみません：：」
 かなあ？」
 麻子 「おばさんよりお母さんのほうが嬉しい

麻子「毎日ありがたいわねえ」
 雪「彼氏ですか」
 麻子「なの？」
 雪「西垣先生？」
 麻子「仲いいんでしょ？」
 雪「西垣先生からのプレゼントですか言わないでよ。ただの
 お見舞い品」
 麻子「向こうはどうかしらねえ（雪が持って
 いるうさぎのりんごに気づいて）あら、
 かわいいうさぎ」
 雪「朋樹が剥いてくれたの」
 麻子「器用ねえ：：食べないの？」
 雪「んー、もったいないから食べれなくて」
 麻子「もったいない？」
 雪「食べたらずえなくなるでしょ、だから
 らもったいなくて食べれない。どっちが
 いいかな、腐って食べられなくなるのと、
 食べて愛情がなくなるの」

麻子「食べたからって愛情は無くならないで

しよ？形がなくなっても心に残ったも

のは、朋樹くんがりんごを剥いてくれた

時の感情や、それをもった雪の気持ち

は消えない」

雪「消えないって保障ある？形あるもの

が消えるのは目に見えてわかるけど、感

情は形がないからわからないでしよ？

感情はどこに保存されるの？」

麻子「感情の保存場所？難しいこと言うわ

ね」

雪「私は感情は記憶の奥とか、身体

の一つひとつに残ってると思う。頭で感じ

た強い思いが感情をコントロールしてる

部分で砕け散って、身体を形成している

細胞の……」

麻子「待って、雪。それってもしかして」

雪「哲学の話！形の無いもの、思い出や

愛情はどこに保存されるんだろって、

それが今の西垣先生との課題」

麻子「その話まだ続くの？」
 雪「それより記憶の保存場所の話だけど」
 麻子「はいはい、雪の彼氏よね」
 雪「お母さん！」
 麻子「朋樹くんとは仲良くなれそうだよ」
 雪「お母さんって朋樹に似てるよね。朋樹も難しすぎるって逃げたの。部屋に入ってきた時にノックしないのも一緒だし」
 麻子「だって難しいんだもん」
 雪「なにそれ！ 無理、わからない」
 麻子「うん：：無理、わからない」
 雪「お母さん、どう思う？」
 麻子「ただの教授と学生だったってば。それよりと西垣先生の関係が気になるわ」
 雪「お母さんはいられないかな？」
 麻子「やっぱり西垣先生ね」
 雪「お母さんはどう思う？」
 麻子「忘れないでいられるかな？」
 雪「どこに残せば」

上手側の照明つく。
 大学の教室、講義している西垣。
 一番前の席（長テーブル）に座る朋樹
 は居眠りをしていて、その隣に大輔が
 座っている。
 西垣「その伝わった細胞がまた違う細胞に伝
 わって、Aという細胞がBという細胞に
 前：と、という話だけど、どう思う？
 大輔「朋樹の肩を、大輔が揺さぶる。
 朋樹「うゝゝえ？」
 大輔「起きろ！西垣怒ってる！」
 朋樹「西垣って哲学の：あっ、起きてま
 す！退屈じゃないです、ノートもとっ
 てます！」
 西垣「ノート、白紙だけ？」
 朋樹「あっ！えっ、念写です！」
 西垣「君、面白い能力持ってるね。講義終わ
 ったら僕の部屋に来てね」

朋樹 「はい、喜んで！
 ……え？」
 西垣 「講義を続けませう。えーと、どこまで話
 たっけ？」
 講義を続ける西垣。
 大輔が朋樹に椅子を寄せる。
 大輔 「やっちな！」
 朋樹 「俺、これ終わったら雪のお見舞いに」
 大輔 「安心しろ、雪ちゃんのお見舞いには俺
 らが行くから」
 朋樹 「俺も行く！」
 大輔 「呼び出しにかかっただろ？」
 朋樹 「でも……」
 西垣、怒りを抑えた表情で振り返る。
 西垣 「君たち、どうして一番前の席に座って
 るの？」
 朋樹 「……すみません」
 大輔 「やっちな、朋樹！」
 西垣 「君もだよ」
 大輔 「……すみません」
 おとなしくなる朋樹と大輔。

朋樹 「な？」
 西垣 「お前、橋口さんと付き合ってるんだよ」
 朋樹 「猫かぶりかよ」
 西垣 「当たり前前だろ。講義のときはいつ他の
 ラ違いませぬ」
 朋樹 「いえ、なににも：先生、講義中とキャ
 西垣 「おい、今なんて言った？」
 朋樹 「後ろっていつても、講義受けてる人少
 西垣 「一番前で寝るかなあ？それなら後ろの
 椅子に座る西垣。ト）の照明を落とすでも可）
 朋樹、姿勢を正して立っている。
 子を手前側に置き、奥側（病室のセツ
 舞台転換、中央に机と椅子。（机と椅
 照明、徐々に暗くなる。
 講義を続ける西垣。

朋樹 「クラスの出し物が演劇だったけど、演
 西垣 「なに？ オーデイションに落ちた？」
 に落ちたから懂れだとか」
 ロミオとジュリエットのオーデイション
 ばあるほど燃えるというか、高校の時、
 エーシオンに弱いんだよ！ 障害があれ
 朋樹 「雪はそういう少女漫画みたいなしチュ
 西垣 「するわけないだろ、学生と教授だぞ」
 朋樹 「ゆ、雪に変なことしてないだろうな！」
 西垣 「二人きりだけ？」
 りじゃないよな？」
 朋樹 「研究室に遊びに来る？ まさか二人き
 るから」
 西垣 「橋口さん、俺の研究室によく遊びに来
 が付き合ってることも」
 入院してるのと知ってるんだ？ 俺と雪が
 朋樹 「そうだけ：：あんだ、どうか？」
 んのお見舞いに行つてたからか？」
 西垣 「橋口雪さんだよ。遅刻したのは橋口さ

「 たった 」

西垣 「 誰だ、橋口さんを落としたりやつ！ 俺

が抗議してやる！ 」

朋樹 「 よろしくお願いしまゝ： いや、待て待

て待って、どこに電話しようしてる？ 」

西垣 「 橋口さんを不採用にしたやつだ！ 」

朋樹 「 連絡先知ってるの？ それ以前に、誰

だかわかるのかよ 」

西垣 「 彼女の高校の同級生名簿を片っ端から

： ； まずはライン、いやSNSが妥当か 」

朋樹 「 無茶苦茶だな！ ていうかダメ、そう

いう個人情報あさるのダメだから！ 」

朋樹、西垣からスマホを取り上げる。

取っ組み合いになるが、朋樹が勝つ。

朋樹 「 あんた、ちよつとおかしくないか？ 」

雪のため、そこまで： ； 」

西垣 「 惚れてるんだ 」

朋樹 「 は？ 」

西垣 「 生まれて初めてなんだ、こんな気持ち

になっただのは。勉強ばっかやってたせい

西垣 「はあー、こんな日本語もまともに喋れないガキがなあ。これなら俺のほうがマ
 朋樹 「：：雪は俺の彼女だ！」
 西垣 「彼女は俺？お前、女なのか？」
 朋樹 「は？：：はあああ？雪の彼女は俺さん。俺の彼女だ！」
 西垣 「だから俺、お前に宣戦布告する！」
 朋樹 「雪は三次元ですよ：：」
 わかった」
 飛び出してきたんだって、一目見た瞬間
 話かけてくれて：：この子、二次元から
 さで小鳥の囀りのような綺麗な声で俺に
 橋口さんなんだ。小動物のようないが許
 せなくなってる、そんな時に出会ったのが
 の野蛮な態度とかちよつとした仕草が許
 がどうのと言われる頃には現実の女の子
 面から飛び出して来ない！親から結婚
 て、彼女といえればいいも二次元だけ
 でリアル女子と接する機会ほとんどなく

西垣 「そういえば、検査結果聞いた？」
 朋樹 「余計タチ悪いだろ！」
 西垣 「教授まで上り詰めるには、ある程度の年月が必要だからな。でも心配するな、てるんだな！」
 朋樹 「てことは二十代の時期はとつくに過ぎるっつるっつる、二十代に見えるだろ？」
 西垣 「お肌つるっつる、二十代に見えらるだろ？」
 朋樹 「ぐっ：：待て、あんた何歳だよ？」
 西垣 「いや、お前ロミオになりたいの？」
 西垣 「いや、オーデイションに落ちてジュリエットになれなかったのか。じゃあ俺もユリエット？」
 朋樹 「俺がロミオだ！」
 西垣 「橋口さんって少女漫画みたいなのが好きなんだっけ？俺がロミオで彼女がジ
 朋樹 「そうだよ、あんた教授だろ！学生に
 西垣 「手を出すな！」
 シだろ、教授だし？」

朋樹 「検査結果？」
 西垣 「面と向かっては聞きづらくてさ。彼氏
 のお前なら知ってるかと思っ
 たんだ。どうだった？」
 朋樹 「どうって……」
 西垣 「もしかしてまだ結果で
 ない？」
 朋樹 「なに時間かかるのか？」
 朋樹 「ちよ、ちよつと待て。なん
 だ、検査つ
 て？」
 西垣 「は？え、なに、知らないの？」
 朋樹 「ただの風邪って雪、言っ
 たけど」
 西垣 「ただの風邪で入院するわけ
 ないだろ」
 朋樹 「えっ……だって今日も普
 通に」
 西垣 「聞いてないのか！（喜々
 として）彼氏
 も知らないことを彼氏じゃない
 俺が知っ
 てるってことは、やっぱり橋口
 さんは俺
 の彼女だったんだ！二次元を愛
 でて来
 た俺だけが彼女の本当の姿を……」
 西垣、落ち込んでいる朋樹を見
 て言葉
 を止める。

西垣 「待って、その言い方だと俺が昔は少女だったみたいじゃないか。俺だって昔は少女だったんだよ、少女漫画読んだことないのか？」

朋樹 「俺、少女だった時期ないから」

西垣 「馬鹿だな、お前。今までの人生何してきたんだよ、少女漫画読んだことないのか？」

朋樹 「なんだよそれ、言ってくれないとわか欲しい」

西垣 「とにかく、女心は複雑なんだ。口では大丈夫って言けど、本音は大丈夫じゃないし、大丈夫じゃないことに気づいて」

朋樹 「自分でキモいって言うてる」

西垣 「ふざけるな！橋口さんがこんなにモいわけないだろ！」

朋樹 「まさか今の、雪の真似じゃないよな？も気付いて欲しいへ女の子っぽく」

西垣 「いな、でも言っちゃダメだ。ああ、で言っておこう。ああ、でも心配して欲しい」

西垣 「感かけちゃいけない。だから大丈夫って」

「『骨刻 -コツコク-』七種夏生

朋 樹 「は？」
 西 垣 「まりりんは、嘘をつく時に左目をこす
 朋 樹 「あー、いいい。そういうマニアックな話
 朝の顔、愛と正義の……」
 西 垣 「知らないのかこのやろう！ 幼女達の
 朋 樹 「誰だよ、まりりん」
 西 垣 「例えばまりりんは」
 朋 樹 「法則？」
 嘘をつく時には一つの法則があるんだ」
 いんだけど、そういう天邪鬼な女の子が
 ちゃって……あのさ、アニメの知識で悪
 が（落ち込んでいる朋樹を見て）「ん
 西 垣 「そうだな。やっぱりお前なんかより俺
 朋 樹 「嘘を見破る？ そんなことできるわけ
 るくらい」
 なればいいんじゃないか？ 嘘を見破れ
 年だった。まあ、あれだ。お前が大人に

朋樹 「急に変な名前の子来た。もしかして次
 西垣 「むりりんは」
 朋樹 「誰だよ、みりりん：：ああ、いい。ア
 語になる」
 だけじゃない。みりりんは嘘つくとき敬
 西垣 「ああ、癖って言うのは目に見えるもの
 朋樹 「あ、話し戻るんだ？ どうぞどうぞ」
 西垣 「それでな、癖ってのは」
 朋樹 「馬鹿にしてるわけじゃ：：」
 与えたと思ってる？ 馬鹿にすんなよ！
 どれだけの少年少女に夢を希望と知恵を
 西垣 「ふざけんなよ、お前！ 日本アニメが
 朋樹 「でもそれ、アニメの知識：：」
 き倒すことが出来ないんだ」
 西垣 「天邪鬼な子は根が優しいから、嘘を貫
 雪にもなにか法則がある？」
 朋樹 「オッサンがやるとキツイな。じゃあ、
 (左目をこする仕草)」
 西垣 「気付いて欲しい嘘をつく時、こう：：」

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

雪 「ク
：
：
」
そんな
こと
いい
から
。何
があ
った
の？

朋 樹 「ライ
バル
とケン
カした
。ごめ
ん、ノ
ツ

雪 「ちよ
、どう
したの
、その
傷」

朋 樹 「ちわ
！：
：
あ、ノ
ツク：
：
」

膏を貼
るなど
、怪我
している
。
上手か
ら朋樹
、病室
に入る
。顔に
絆創

3
・

朋 樹 と西垣、争
いを始
める。

な
いだろ
、草系
かよ」

西 垣 「も
りりん
？そん
な名前
の子い
るわけ

め
ものも
りりん
じゃな
いのか
よ！」

朋 樹 「なん
で『や
』にな
るんだ
よ！ま
みむ

西 垣 「そ
してや
りりん
は」

朋 樹 「い
るのか
よ、め
りりん
！」

西 垣 「め
りりん
は嘘つ
かない
」

は
めり
りん？
」

朋樹 「誤魔化さないで。検査ってなに？」
 雪 「あっ、だから西垣先生とは何も」
 朋樹 「今それいうの？ 検査は？」
 きな 彼氏は朋樹だけです」
 専門家として尊敬してるだけ。私の大好
 同じことで怒られた。西垣先生は哲学の
 雪 「ふふっ、ごめんなさい。お母さんにも
 朋樹 「本気で怒るよ？」
 雪 「もしかして朋樹、ヤキモチやいてる？」
 朋樹 「それは四次元ロボット！ じゃなくて」
 ついてる？」
 雪 「二次元？ 私、お腹のところにポケット
 次元として見てる」
 んて知らなかったし、あいつ雪のこと二
 朋樹 「雪、俺怒ってるから。西垣と仲良いな
 雪 「先生と話したんだ！ どんな話？」
 朋樹 「検査するって聞いた、西垣から」
 雪 「えっ？」
 朋樹 「ねえ、検査ってなに？」
 ライバル？」

雪 「ごめん。朋樹に言ったら泣いちゃうっ
 け ど な ん か 、 聞 き づ ら く て ー
 ん に ； ； お 母 さ ん に 聞 け ば い い ん だ ろ う
 み た い だ か ら 大 丈 夫 。 何 か あ れ ば お 母 さ
 な く て 。 あ 、 で も お 母 さ ん は わ か っ て る
 雪 朋 樹 「 そ う な ん だ よ そ れ 、 自 分 の こ と だ ろ ？ ー
 な っ ち ゃ っ て ー
 け ど な ん か 、 途 中 か ら 、 わ け わ か ん な く
 ； ； 専 門 用 語 が あ っ た て の も あ る か も だ
 雪 朋 樹 「 違 う の 、 本 当 、 私 も よ く わ か ら な く て
 ん と 検 査 し ま し ょ う っ て 、 え っ と ー
 雪 朋 樹 「 質 問 に 答 え て ー
 雪 朋 樹 「 だ か ら 大 丈 夫 だ か ら 、 大 丈 夫 ー
 朋 樹 「 な ん の 検 査 ？ ー
 雪 朋 樹 「 な い か ら 大 丈 夫 よ 、 大 丈 夫 ー
 雪 「 ち ょ っ と 、 ね 。 で も た い し た こ と じ ゃ

の かな、死んじゃう病気だったなら
 に 元気だよ？ 元気なのに：：どうなる
 雪 「検査って何だろう。だって私、こんな
 朋 樹 「うん：：」
 雪 「怖いよ、本当に？」
 朋 樹 「いいよ、なに？」
 雪 「謝らなくていいから、もう一つ弱音吐
 朋 樹 「あ、ごめ：：」
 雪 「ふふっ、今それ言う？ 今は私が朋樹
 朋 樹 「：：雪も、俺の彼女でいてくれてあり
 がとう」
 朋 樹 「：：雪も、俺の彼女でいてくれてあり
 雪 「そばにいてくれてありがとう。泣ける
 場所を作ってくれて：：私の彼氏でいて
 雪 「そばにいてくれてありがとう。泣ける
 朋 樹 の手を頬に持っていくなど。もしくは
 雪、朋樹の手を握り締める。もしくは
 朋 樹 がいてよかったよ」
 雪 「朋樹がいてよかったよ」

雪 「えっ？」
 朋樹 「よくあることだから」
 雪 「うそ……でも」
 朋樹 「俺、最初間違っつてそっちに入ったんだ。受付で橋口さんどこですかって聞いて行ってしまったらおばあちゃんが寝ててさ。雪、いつの間にこんなに老けたんだーって」
 朋樹 「それ、検査って」
 雪 「え？」
 朋樹 「この病院に入院してる橋口ってさ、雪だけじゃないんだ。303号室に橋口って名前の人がいってさ、その人のこと言ってたんじゃない？」
 朋樹 「それって、雪の話？」
 朋樹 「そういうことよね？」
 朋樹 「病气やばいよね、かわいそうって。話してるの聞こえちゃって……やばいって、てるの聞こえちゃって……」
 朋樹 「死ぬわけない、こんなに温かいのに」
 雪 「看護師さんが言ってたの、橋口さんの」

朋 雪 朋 雪 朋 雪 朋 雪 朋 雪
 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹
 「 えっ、なんで知ってるの？ 」
 「 マラソン大会、リタイアしてたよね？ 」
 神 経 悪 い の か な
 こ ん な に 元 気 ！
 し て 親 や 先 生 達 困 ら せ て た 。
 で 来 て く れ る の か ー
 ス は ど う な る ん だ 、
 う だ っ た か ら 。
 朋 樹 「 雪 の 不 安 な 気 持 ち は わ か る よ 。
 雪 「 う ん ！
 朋 樹 「 だ ん だ ん だ 、 生 き て る 。
 雪 「 私 と 一 緒 ！
 こ え ち ゃ っ た ん だ
 陰 で 。 先 生 と 看 護 師 さ ん が 話 し て る の 聞
 朋 樹 「 あ 、 や ば い っ て の は 俺 の 前 じ ゃ な く て
 雪 「 嘘 、 先 生 が そ ん な こ と
 ば い で す ね っ て 先 生 が
 咳 が 止 ま ら な く て 病 院 い っ た ら こ れ は や
 検 査 し ま す っ て 。 中 学 の 時 だ っ た か な ？
 朋 樹 「 俺 も 言 わ れ た こ と あ る よ 、 や ば い か ら

朋 樹 「嘘つけ！ 知ってるんだからな、俺」
 雪 「モテないモテない。告白もされてない」
 朋 樹 「かっこよくないしモテない！ 雪の方」
 雪 「嘘だあ、かっこいいもん、朋樹」
 朋 樹 「本当に！」
 雪 「から、前にも言ったけどモテないから、」
 朋 樹 「好きだよ！ 好きだけど！ 何も無い」
 雪 「大好きな彼氏の過去にまで嫉妬する女」
 朋 樹 「バリタインなら俺喜んでるって。チ」
 雪 「ねえ、入院ってクリスマスの時期だったの？ バレタインじゃなくて？」
 朋 樹 「うっそ、その頃から：：」
 雪 「見てたから」
 朋 樹 「彼氏になってほしいなあって、思って」

朋樹 「雪って、嘘つくとき同じ言葉を二回繰
雪 「一回？」
朋樹 「一回だ、よかった」
雪 「：：うん、安心した」
と は 安 心 した？
朋樹 「大丈夫だってわかったただろ？ ちよっ
雪 「えっ？」
朋樹 「雪、安心した？」
雪 「なに？」
朋樹 「：：あっ、わかったかも」
雪 「ふふふっ、ごめん。笑ってるね」
朋樹 「笑ってるじゃん！」
笑 っ て な い か ら 、 笑 っ て な い
雪 「だっておかしくて：：気にしないで、
朋樹 「わ、笑いすぎじゃない？」
好 き ：： あ は は は は っ
雪 「ふふっ、朋樹のその一人ノリツツコミ
知 り ま せ ん
朋樹 「：：ごめんなさい。嘘つきは俺でした
雪 「知ってるの？」

雪 「好きに決まってるでしょ、彼氏なんだ
朋樹 「俺のことは？」
雪 「尊敬してるだけ」
朋樹 「好きじゃないよ、そういう意味では。
雪 「西垣先生？」
朋樹 「雪、西垣のこと恋愛として好き？」
雪 「西垣が言ってた」
朋樹 「天邪鬼な女の子には法則があるって、
雪 「：：どうして気づいたの？ お母さん
朋樹 「二回言ったな、自覚してるってことか」
雪 「知らない」
朋樹 「もしかして自覚してる？」
雪 「自覚してない自覚してない、知らない
朋樹 「もしかして自覚してる？」
雪 「あっ：：」
朋樹 「ほら、今二回言った」
雪 「な、なに言ってるの。違う違う」
つてないとか」
大丈夫とか、笑ってるのに笑ってない笑
り返すんだ。大丈夫じゃないのに大丈夫

朋 樹 「 に 雪 朋 樹 た 出 雪 「 帰 朋 樹 「 あ 、 ご め ん 。 講 義 始 ま る か ら そ ろ そ ろ
 樹 「 明 日 も 来 る か ら 」
 「 か ら か わ な い で ！ あ り が と う 、 本 当
 朋 樹 「 一 回 だ な 、 正 直 で よ ろ し い 。
 「 た 出 雪 「 帰 朋 樹 「 あ 、 ご め ん 。 講 義 始 ま る か ら そ ろ そ ろ
 「 も う そ ん な 時 間 ？ あ り が と う 、 元 気
 朋 樹 「 あ 、 ご め ん 。 講 義 始 ま る か ら そ ろ そ ろ
 雪 「 も ！ 」
 朋 樹 「 な い っ て 、 そ ん な の 」
 雪 「 ず る い 、 朋 樹 の 癖 も 教 え て ！ 」
 朋 樹 「 い い こ と 知 っ た な あ 」
 雪 「 待 っ て ！ も し か し て 一 生 、 私 の 嘘 は
 朋 樹 「 試 し て た っ て 言 い 方 は 人 聞 き が 悪 い な
 雪 「 ！ ！ 今 の そ う い う こ と ？ 試 し て た ？
 朋 樹 「 一 回 だ な 、 よ し 。
 から 」

椅子に座り机に突っ伏している朋樹。

雪 「うん。また明日」

朋樹 「また明日」

朋樹 「なに言っただよ、俺。違う橋口さんとか、俺も入院したとかそんな嘘しかつかない、嘘つくことでしか慰められない

朋樹、走って去る。

病室の雪、正面を向いて、

「それは私の検査結果が出た後に知ったことなんだけど、橋口なんて人いなかっただよ。この病院に入院してる橋口って私だけだった。朋樹が入院した話だっけ

と：私を元気付けるために嘘をついてくれたんだよね、ありがとう」

照明変化、舞台転換。

朋樹 「問題ありません、問題ない病気ですって」
 西垣 「なんてって……大丈夫ですよ、大丈夫、
 朋樹 「検査結果の話聞いた時、雪、なんて言
 西垣 「は？」
 朋樹 「何回言ってた？」
 西垣 「大丈夫だったんだろ、橋口さん。検査
 は異常なかった、大丈夫って」
 朋樹 「朋樹は反応せず、西垣少し困惑。
 こと言わせるな！」
 講のほうがみんな嬉しい……って悲しい
 西垣 「うるせーな、自主休講だよ。どうせ休
 に休講になるんだろ？」
 十分経つぞ。講師が来なかったら自動的に三
 朋樹 「あんなこそ。もうすぐ講義始まって三
 西垣 「こんなところにいるのか？」
 いた西垣、朋樹に向く。
 後方（本棚があると仮定して）を見て

朋樹 「出ていけつて言われた。面倒くさいっ
 て思ってるでしょ、なんでこんな女と付
 れよ。彼氏だろ？」
 西垣 「クリスマスってそんなに早く：：それ
 ならなおさら、少しでも長く傍にいてや
 過ごせない」
 死ぬかもしれない。クリスマスは一緒に
 朋樹 「大丈夫じゃない、問題のある病気だ、
 回言つてた。ってことは」
 西垣 「二回同じ言葉？：：大丈夫って、二
 を繰り返すこと」
 法則がある。雪のそれは、二回同じ言葉
 ただろ、天邪鬼な子が嘘をつく時は何か
 朋樹 「嘘なんだよ。雪は嘘をつく時、二回同
 はそんなに落ち込んで：：」
 西垣 「よかったじゃないか。で、なんでお前
 って」
 は一緒に過ごせる、一緒に過ごせるから
 やない、死ぬ病気じゃない。クリスマス

西垣 「そんなお前がいいんだよ、橋口さんは頼りがいのある別の誰かじゃなくて、お
 朋樹 「でも、俺なんか：：」
 前 「なんだよ！」
 ガキでバカだけど、橋口さんの彼氏はお
 てやるよ、お前が橋口さんの彼氏だ！
 西垣 「ガキだけど彼氏だろ！ はつきり言っ
 だからな」
 朋樹 「悪いかよ、俺はどうしようもないガキ
 で逃げてきたのか？」
 西垣 「あーもう、いい加減にしろよ！ それ
 朋樹 「嫌だ、そんなの嫌だ」
 西垣 「それ、本気で言ってる？」
 くれよ」
 相手してやってくれよ、雪のこと慰めて
 て：：あんな雪のこと好きなんだろ？
 朋樹 「俺、何も出来なかつた。何も言えなく
 西垣 「混乱してんだよ、橋口さん」
 つて。りんご、投げつけられた」
 き合ったんだろうって後悔してるでしょ

西垣 「橋口さんだったって同じこと思ってるぞ、
どうして私がつて。だけど潰れるな、二
朋樹 「ダメだ、俺はガキだから、雪を傷つけ
てしまう。：：どうして俺らなんだ、どう
して：：」
西垣 「それでも橋口さんはお前に本音を言っ
てるんだから、お前も本音でぶつかれ、
それが礼儀だ」
朋樹 「でも役に立たないし、話をするのが怖
い。俺の言葉で雪が傷つくかもしれない」
西垣 「どうすればいいかなんて後で考えれば
けたらいいんだよ」
朋樹 「じゃあどうすればいい？　なんて声か
対、逃げるな」
西垣 「今逃げたら一生後悔するぞ。橋口さん
のためだけじゃない、自分のためにも絶
て欲しいんだよ！」
朋樹 「でも：：」
前を頼りたい、大好きな彼氏にそばにい

大輔 「違うんだよ、雪ちゃん。朋樹は」
 奈々 「えっ？」
 雪 「朋樹のことなら気にしないで」
 奈々 「そん…」
 大輔 「ダメだった、電話も出ない」
 大輔 「んは？」
 大輔 「大輔に〜どうして一人なの？ 大住く
 奈々 「ちよ、ちよつとへ雪に聞こえないよう
 雪 「大輔君、来てくれたんだ。ありがとう」
 大輔 「おーす、おつかれさま！」
 大輔 「して病室に入る。病室のベッドに雪、その近くに奈々。
 上手から来た大輔、ドアの前で一呼吸
 暗転
 西垣 「おい！ 逃げな、逃げるなよ！」
 朋樹 「つらい、俺だってつらい。朋樹、立ち上がって走り去る。」
 人とも潰れちゃダメだ」

雪 「大丈夫です、大丈夫」
 西垣 「最近来れてなくてごめんね。大丈夫？」
 奈々 「基礎哲学の？ えっ？」
 大輔 「えっ、西垣？」
 雪 「先生！」
 西垣 「あいつ来てないのか」
 大輔 「西垣、病室に入る。」
 雪 「ごめん、意地悪いこと言ってる。八つ当たりだ、こんなの：：ごめん」
 大輔 「：：えっと」
 雪 「もう一週間経つよ、朋樹がここに来な
 大輔 「朋樹さあ、忙しいんだよ！ 今日提出
 のレポートもあつて、最近忙しそうで」
 奈々 「雪：：」
 西垣 やってくる。
 ドアの前に立って盗み聞き。
 夫、私が悪いもん。朋樹に酷いこと言っ
 て傷つけて：：仕方ないよ、仕方ない」
 雪 「いいの、気を遣わないで。大丈夫大丈夫」

西垣 「…：…なるほど、二回か」
大輔 「ちよ、ちよつとすみません。西垣先生
雪ちゃんとはどういう関係で？」
西垣 「二次元の彼女？」
奈々 「は？」
大輔 「二次元の…：先生まさか、ゆりりんを
知ってます？」
西垣 「えー、なに君！ マニアック過ぎない？
大好き！」
雪 「意気投合する西垣と大輔。
大輔くんって面白いよね。いい人捕ま
えたね」
奈々 「ええー、全然。大住くんのほうがよっ
ぽど…：ごめん」
雪 「平気平気。誰だって逃げたくなるよ、
こんな状況。朋樹は悪くない、悪くない」
奈々 「雪…：」
大輔 「そうだよ、雪ちゃん。あんなやつ気に
しになくていいよ。バカだからさあ、朋
樹は！」

雪 「も思っただろうとか。別れたほうがいいかとも
 朋樹 「どうすればいいとか、俺はどうした
 西垣 「考えてた？」
 朋樹 「考えてた」
 西垣 「一週間も来てなかったらしいな、どう
 奈々 「ちよつと、西垣：：」
 西垣 「大住、今まで何してた？」
 奈々 「もしかして私たち邪魔？ 大輔、帰ろ
 朋樹 「ごめん、しばらく来てなくて」
 雪 「：：久しぶり」
 朋樹 「久しぶり、雪」
 奈々 「猫かぶってたわけね、講義中は」
 大輔 「先生、講義中とキャラ違いませんか？」
 西垣 「なんだ、バカなのは君じゃないか」
 な、俺に」
 だよお前ほんとバカだなんて怒られたよ

朋樹 「よくわからないけど、一つだけわかっ

た。俺は雪が好きだ。ここで逃げたら一

生後悔するって西垣の言葉が、今ならわ

かる：：ごめんなさい、好きです」

雪 「今それいうの、ずるい」

朋樹 「ごめん」

雪 「謝らなくていい、朋樹は悪くない：：

って自分に言い聞かせてたけど、無理！

酷いよ、見捨てないで：：戻ってきてく

れて、ありがとう」

朋樹 「ごめん」

雪 「どうして謝るの？ 私は朋樹にお礼言

ったの！」

朋樹 「好きだよ、雪」

雪 「いまそれ言う？ 私も好き、朋樹のこ

と好き！大好き！」

奈々 「あ、じゃあ私たちはそろそろ」

朋樹 「待って、ついでにちょっと付き合っ

くれない？」

朋樹、手に持っていた大きな紙を開く

奈々「なにこれ？ポスター：：じゃない、

手書き？」

西垣「きつたない字だな、大住が書いたの

か？」

大輔「本当に！全く、朋樹は！」

朋樹「大輔に言われたくない」

雪「約束事五箇条？」

「ポスターの文字」

約束事五箇条

「俺のことを頼りにすること

「俺には本音を言うこと

「本音がいくら醜くても、俺は逃

げません

「だから安心して俺を信じること

「一つ、一緒に生きよう

朋樹「橋口雪さん、復唱お願いします。一つ、

俺のことを頼りにすること」

雪「えっ？あっ、一つ、俺のことを頼り

にすること：：なんか変じゃない？」

西垣「俺って所がおかしいだろ。大住のこと

大輔 「あ、今恥ずかしくなっただろ？」
 朋樹 「……一緒に生きよう」
 雪 「一つ、だから安心して朋樹を信じます」
 朋樹 「一つ、だから安心して俺を信じること」
 逃げません」
 雪 「一つ、本音がいくら醜くても、朋樹は逃げません」
 朋樹 「一つ、本音がいくら醜くても、俺は逃
 雪 「一つ、朋樹には本音を言います」
 朋樹 「一つ、俺には本音を言うこと」
 雪 「えっと……一つ、朋樹のことを頼りに
 朋樹 「……俺のことを頼りにすること」
 奈々 「哲学関係ない……あ、気にせず続け
 西垣 「教授、もしくは先生をつけようね、敬
 大輔 「西垣すげー！ さすが哲学教授！」
 言い換えたらどうだ？」
 を頼りにしますみたい
 に橋口さん目線
 で

雪 「もう逃げない？絶対？」
 朋樹 「いい絶対、絶対に逃げない、信じていい。一緒に生きてくれる？」
 雪 「一緒にいてもいいの？私、朋樹を頼
 奈々 「西垣：：」
 西垣 「だよね！こういうのが好きだよね、
 雪 「嬉：：嬉しい」
 うが
 西垣 「本当にこんなことだな。発想がベタな
 朋樹 「ずっと考えてたんだ、俺に何が
 西垣 「なあ、なんだこれ？」
 奈々 「大輔、茶化さない」

朋樹「絶対逃げない、絶対に」
 雪「二回言った、絶対って」
 朋樹「それは雪の癖だろ。俺のは決意、強調
 だから」
 雪「ふふっ、あはははっ」
 泣きながら笑う雪と、それを取り囲む
 朋樹、奈々、大輔。
 西垣、客席に向かって
 西垣「それから二人は、今まで一番濃い時
 間を過ごした。毎日会いたいという些細
 なわがままから、たくさんの八つ当たり
 まで。一つひとつ消化して、出来ること
 は確実に実行し、出来ないことは出来な
 いとはつきり断った。それでも、彼女が
 泣き止まないのと彼は言った。まるで雨の
 ように、彼女の涙が止まらないと」
 照明暗くなる。
 西垣、奈々、大輔去る。
 薄暗い中、朋樹と雪が話をしたり、言
 い争いをしたり、声に出さず動作で表

現、時が流れていく。

朋樹 「ただけど涙はいつか枯れる。どんなにつ
朋樹、中央に立ち客席に向かつて、

らくて悲しくても、いつか涙は枯れるん
だ。雨が上がって青空が広がるように、
絶対。そうに決まってる」

雪、目を開ける。
朋樹、ベッド脇の椅子に座る。
「私、ずっと泣いてばかりだった。わが

ままもたくさん言った、ごめんね」
「いいよ、それで雪が笑えるなら」
「涙が枯れたのかな。朋樹がたくさん泣

かせてくれたから、こうして笑うことが
出来る。りんご：：」
朋樹 「りんご？ 食べたいなら買ってくるけ

「違う、最初にお見舞い来てくれた時の
ど」

やがて全部の細胞に繋がる
 Bという細胞に伝わってという感じ
 た違う細胞に伝わって、Aという細胞が
 一つに繋がって、その伝わった細胞が
 で砕け散って、身体を形成してる細胞の
 い思いが感情をコントロールしてる部分
 朋樹「残ってるから、細胞に。頭で感じた強
 雪「どうして？」
 朋樹「消えないよ」
 えちやう？
 そうしたら、朋樹の中の私への感情も消
 ったから私っていう形がなくなるでしよ？
 雪「だから例えばだっ。例えば、そう
 朋樹「やめろよ、そういう話」
 雪「例えば、私がいなくなったとして」
 朋樹「感情？」
 残ると思う？」
 っちやっただ。ねえ、朋樹、感情はどこに
 べれなくなっ。形も味もわからなくな
 りんご。結局捨てちゃったの、腐って食

雪 「ほう」
 朋樹 「に残るものとして形見をそばにおいてお
 雪 「わかった。わかったから、なに？」
 朋樹 「例え、雪がいなくなったとして、形
 雪 「じゃないから、例え、話だよ？」
 朋樹 「細胞を奮い立たせるようなもの、それ
 雪 「うん：：」
 朋樹 「それなら、形を残せばいい」
 雪 「え、てなくなる、とか思うだろ、雪は」
 朋樹 「俺も大人になっちゃったって話、ライバルの
 名言を我が物顔で彼女の持論なんだけど。す
 で、ここからは俺の持論なんだけど。す
 べての細胞に伝わらなかったらいつか消
 朋樹 「受け売り？」
 朋樹 「すごい、西垣先生みたい」
 雪 「受け売りですから」

。『骨刻 -コツコク-』七種夏生

朋樹 「形見を見れば好きだった感情を思い出
 して細胞が動き出す。想いが消えそうに
 なってもまた、それを見て細胞が感情を
 奮い立たせてっ。サイクル。両方残
 せばいいんだ、形に残る思い出と形に残
 らない思い出と。そうすれば、どちらか
 を思い出した時にもう片方も思い出せる」
 雪 「なるほど」
 朋樹 「西垣っぽい？」
 雪 「ううん、朋樹っぽい。今の言葉は西垣
 先生には言えない、朋樹だから言えた言
 葉だと思っから：：ありがとう」
 西垣 「西垣、病室に入ってる。呼んだよう
 ないま橋口さんが俺を呼んだような」
 雪 「先生！」
 朋樹 「呼んでません、悪口言っただけです」
 雪 「ちよつと朋樹！」
 朋樹 「暇だな、あんた。講義は？」
 西垣 「どうせ誰も俺の講義なんて楽しみにし
 てない：：っ。言わせるな！」

朋樹 「ああ、早いほうがいい」
 大輔 「リボン作ったのは朋樹だろ。渡す？」
 朋樹 「すごい！ありがとう」
 大輔 「こんな感じはどう？」
 にリボンなどの可愛い裝飾がしてある。
 の中を覗く。中身は千羽鶴、紐の部分
 らすゝその隙に朋樹と大輔、大きな袋
 奈々、雪のそばに寄る。へ雪の気を逸
 敬語の使い方を覚えようか？」
 西垣 「君たち、俺、教授だからね？　まずは
 大輔 「サボりだな、西垣！」
 朋樹 「へ西垣に向かってゝマジかよ？」
 も全部休講にしてたでしょ？」
 奈々 「どうしてここにいるの？　出張で講義
 大輔 「あれ、西垣じゃん」
 大輔、大きな袋を抱えている。
 大輔と奈々、病室に入ってくる。
 西垣 「：：よかった、笑ってる」
 雪 「ふふっ」
 朋樹 「自分で言ってるじゃん」

朋樹と大輔、雪へ向き直る。
朋樹「準備できた？」
雪「準備？」
朋樹「みんなから、雪へプレゼント」
朋樹、大輔が持っている袋の中から千羽鶴を取り出す。
雪「鶴？」
大輔「そう、千羽鶴！」
奈々「同じ学部の子とか、一年の男子まで、僕にも折らせてください橋口先輩のファンなんです。一緒に作ってくれた」
朋樹「一年の男子？ 待って、俺、そいつ知らない」
奈々「そりゃそうでしょ、一方的なファンだから」
朋樹「一方的なファンって……」
大輔「ヤキモチ妬くなよ、朋樹！」
西垣「お前からそれ、講義中にやってただろ？」
「ここ最近、たかさんの生徒がなんかやってるなあ。思ってたんだけども」

大輔 「安心してください、先生の講義でしか
 折ってませんから」
 西垣 「は？」
 奈々 「違う講義じゃ内職なんて出来ないわよ
 西垣 「お前ら……」
 大輔 「感謝してます」
 大輔 「ますます！」
 西垣 「……いいんだ、出席さえしてくれれば。
 一番前の席で居眠りされるより全然……」
 雪 「すごい、こんなにたくさん」
 朋樹 「それだけみんな雪のことが好き……」
 アン、つてことだよ。一方的な……彼氏
 は俺だから、一方的なフアンの男子が」
 奈々 「かぶせる形で……これね、羽のところ
 にメッセーじ書いてるから！」
 雪 「メッセーじ？」
 大輔 「これ俺のだから、読んでいいよ」
 大輔が千羽鶴の一つを雪に見せる。
 鶴を見つめる雪だが、首を傾げる。

雪 「うん、ありがとう」

奈々 「てからゆっくり見てね」

大輔 「見ればいいじゃない。えっと、朋樹のは」

朋樹 「俺？俺は……」

雪 「朋樹はなんて書いたの？」

西垣 「う……ま……この鶴って俺の講義中
うだろ？」

大輔 「それじゃあ一〇〇一話羽鶴になっちゃ
西垣 「じゃあ俺も折る」

奈々 「みんな自分が折った鶴に自分のメッセ
大輔 「あんた鶴折ってないじゃん」

西垣 「いいな、これ。俺も書いていい？」

雪 「ふふっ」

奈々 「自分でも読めない字を書くな！」

大輔 「酷い！……確かに、読めない」

奈々 「あんたの字が汚くて読めないって」

雪 「えっと、ごめん」

麻子「あ、病室に入ってくる。」
朋樹「あ、お母さん」
奈々「おじやましてます」
西垣「へこっそり大輔に、橋口さんのお母さん？」
麻子「ああ、雪がいつも話している」
西垣「いつも話してる？聞いたか大住、橋口さんがお母様に俺の話をしてる？」
元家族「元家族？」
麻子「二次元家族？」
朋樹「西垣、落ち着け。三次元の人に気持ち悪いこと言ってる」
雪「もー！朋樹もみんなも西垣先生に酷いこと言わないで！：：幸せだな」
雪「雪、手元の鶴を見つめる。」
雪「千羽鶴にかけた願いは叶うって聞いたことがある。だけどきつと、私の願いは

朋樹 「あ、ごめ……」

雪 「ノック」

朋樹 「おはよー……」

朋樹 「はい」

朋樹 「よろしくね」

行っ てきます！

： ； へ 恥 ず かし くな った ー ゆ 、 雪 の と こ

朋樹 「わかります。俺もそれでさらに好きに

麻子 「本当にねえ。昔から、それが可愛いと

ね、雪の嘘って」

朋樹 「気付いてしまえばわかりやすいですよ

麻子 「ふふっ、朋樹くんも知ってるのね」

言葉は本当だと思います」

わなかつた、一回だけだったので、その

昨日言っていました、幸せだった。二回言

やなくて本気で、笑つてると思います。

朋樹 「笑ってますよ、雪は無理してるんじ

麻子 「朋樹くん……」

西垣 「お母さんって呼んでんだ？ 仲いいいな
 朋樹 「どっちでもいいだろ？ それより二人
 西垣 「西垣先生、もしくは西垣教授だろ？」
 朋樹 「西垣！ また来たのか」
 朋樹 、ドアを開けて病室に入る。
 をしている。
 西垣 、ベッド脇の椅子に腰かけ雪と話
 照明変化、夕方の色。
 朋樹 、病室を出る。
 を叶えてください」
 い事をするの：：神様、一つだけ、願
 なたの願いは私が叶える。千羽鶴に願
 朋樹は、私たちは生きてる。大丈夫、あ
 雪 「温かいね、朋樹、生きてる証拠だよ。
 雪、朋樹の手を握って独り言のよう
 顔を覆い、項垂れる朋樹。
 に」
 朋樹 「嫌だ。雪と一緒に、生きていき
 雪 「いなくなっちゃダ？」

雪 「はい、ありがとうございます。とうございました。」
 西垣 「どっちだよ。いいよ、どうせ帰るところ
 朋樹 「えっ、本当に帰るの？ もっとゆっく
 西垣 「あんたじゃなくて先生、もしくは教授
 朋樹 「それよりあなた、いつも暇そうだけど
 西垣 「俺が教授だからいいの！」
 朋樹 「あ、そっちなお前って言った」
 西垣 「だからお前なあ！」
 朋樹 「ナイス雪！ ざまあ西垣」
 西垣 「え、ちよ、橋口さん……」
 雪 「幸せです、とつても」
 今 の 彼 氏 の 発 言 ど う 思 う ？
 る 大 学 の 教 授 に 向 か っ て ！ 橋 口 さ ん
 西 垣 「 お い 、 今 お 前 っ て 言 っ た か 、 在 籍 し て
 朋 樹 「 う る さ い な 、 お 前 に 関 係 な い だ ろ 」

朋樹 「冗談で言ったんだけど……雪、何かあ

雪 「どうして？」

朋樹 「なんとなく雰囲気……西垣に何かさ

雪 「れた？」

雪 「西垣先生、でしょ？」

朋樹 「ふざけてないで……本当にどうした？」

雪 「座って、朋樹。今日はお願いがあるの」

朋樹 「おねがい？」

照明、暗くなる。

朋樹、正面に向かって、

朋樹 「彼女はその日、遺言を託した。それか

らまもなくして、本当に間もなく、俺は

彼女の遺言を実行することになった。骨

刻、それが、彼女の遺言の名前」

暗転。

数週間後、雪の実家。

中央に朋樹と麻子、敏行。（舞台転換
65、

2 の場面と同じ。奥に病室のセット、
 演技は手前で。朋樹、麻子と敏行に頭を下
 げている。朋樹「えっ？ 雪の骨って」
 麻子「変なこと言ってるのはわかってます。
 でも、頼まれたんです」
 麻子「頼まれたって、雪に？」
 朋樹「譲ってただけませんか？」
 麻子「でも、遺骨なんて：：」
 敏行「母さん、言う通りにしてやれ」
 麻子「：：理由だけでも、教えてくれない？」
 朋樹「海に行くんです、雪と一緒に、二人で」
 麻子と敏行、去る。
 朋樹、頭を下げて二人を見送る。
 顔を上げてポケットに手を入れ、二人
 が去った方とは別の方向へ歩く。
 波の音、青い照明。
 朋樹「雪が生まれたのは海に面する港町。キ
 ラキラ輝く海面は白だったり、時に島の
 緑を移したり、様々な色に輝いた」

雪 「ふふっ、詩人だねえ」
 美しさを、この目に焼き付けておく」
 島と島を繋ぐ橋の色を、緑に輝く海面の
 よ、この景色を。雪の生まれ育った町、
 朋樹 「いや、写真はいい。記憶に残しておく
 雪 「写真に撮っておく？」
 みた い」
 かった。綺麗な景色だ、まるで一枚の絵
 朋樹 「本当に。もつと早く、一緒に来ればよ
 雪 「もつた いな いことしたね」
 ことも、知らなかつた」
 山の緑を移すことも、波が静かに揺れる
 があるんだな、知らなかつた：：海面が
 朋樹 「うん、初めて見た。こんなに近くに島
 雪 「綺麗でしょ、瀬戸内海の海」
 朋樹 「水平線の見えない海、つて言つてたな
 雪、朋樹のそばに歩み寄つて横に立つ
 朋樹、ポケットから瓶を取り出す。

朋樹 「：：何もできなくてすみません」
敏行 「君が来たなら、何を言っちゃろうかって

ずっと考えとった。父親らしく娘の彼氏に嫉妬して、よくもううちの娘をとか言っ
て。お父さんもうやめてっ
て言う雪と喧嘩になっ
て：：

照明変化（敏行の妄想）
雪、敏行に近寄る。

雪 「お父さんもうやめて」

敏行 「わしは認めん！あの山の頂上まで勝負じゃ、わしに勝てたら交際を認めちや

る。行くで！」

朋樹 「あっ、ちよつとずるい：：」

雪 「お父さん、そんなに早く走ると転：：

敏行 「いたたたた、久々に走ったけんか、こ

んなちっちゃい石ころに」

朋樹 「大丈夫ですか、お父さん」

敏行 「お父さんなんて呼ぶなや！：：まだ」

麻子、三人の元へ駆け寄る。

麻子 「どうしたの？」
 雪 「お父さんが石ころにつまづいて」
 麻子 「まあ大変！ 誰かお医者様を」
 朋樹 「安心してください、お母さん。こう見えて僕、医者なんです」
 敏行 「な：：なんじゃと」
 敏行 「照明変化。（妄想終わり）
 雪と麻子、去る。
 敏行 「そんな未来を想像しとった：：（笑い
 をこらえている朋樹を見て）なにがおか
 しい？」
 朋樹 「だってそんな、ドラマや漫画みたいな
 ：：あと俺、医者にはなれませんが、文学
 部です」
 敏行 「：：俳句勝負で、君が立派な一句を」
 朋樹 「詠んだことすらありません」
 敏行 「わしじゃ。今君が『詠んだ』という
 言葉を使って、俳句は書くんじゃないやうて
 詠むものなんかと思っただくらいにはわか
 らん」

「つたです」

敏行 「雪のことは忘れたほうかええ」

朋樹 「嫌です、それは：：無理です、嫌です

敏行 「雪だけに執着すんのは早え。人生つー

もんは長いけん」

朋樹 「そうだけど今はまだ、雪だけでいいっ

て思ってたていいですか？」

敏行 「強い、君は」

朋樹 「雪が強かったですから：：強く生きる

ことは、雪から教えてもらいました」

アナウンサー 『まもなく、ホームに電車が入り

ます』

敏行 「行くんじゃない？」

朋樹 「はい」

敏行 「また来んさい」

朋樹の声、電車の音に消される。

朋樹 「ありがとうございました」

敏行 「ああ」

朋樹 「：：お父さん！俺、また来ます。来

年も四年後も絶対、この町に来ます！」

敏行 「待っ とる ； ； 母さんと、雪と一緒に

つと、待っ とる けん」

朋樹 「はい、また」

敏行 「また ； ； ありがとう」

扉の閉まる音

敏行 「娘の 一つ目の遺言は、遺骨の欠片を海

に撒くこと。海が好きな子じゃた。お父

さん、海に行こうって手を引っ張ってき

て ； ； 貝殻を探そうってな。その時は、

いつか娘が別の男と貝殻拾いをするなん

て想像もせんかった。そしてもう一つ、

これは彼にしか出来ん。だから娘は彼に、

最後にして最愛の彼氏に遺言を託した」

照明変化（回想）

8（遺言を残す場面）の続き。

椅子に座る朋樹とベッドの雪。

朋樹 「わかった、海に骨の欠片を撒けばいい

んだな」

雪 「それが一つ目の遺言。そしてもう一つ
朋樹 「骨刻」
雪 「そう、骨に刻むって書いてコツコク。
ひと摘みくらい、本当に少量の私の骨を
指輪にして」
朋樹 「指輪？」
雪 「骨を砕いて、シルバーのリングにそれ
を刻んで、私の骨を飾りに指輪を作って」
朋樹 「そんな特注指輪いくらすると思ってる
んだよ。わがままだよな、雪って」
雪 「わがままな女は嫌ですか？」
朋樹 「嫌じゃない：：雪ならどんな我が儘で
も、嫌にならない」
雪 「ふふっ。いい人捕まえたなあ、私！」
朋樹 「幸せ者だな、雪は。俺も、俺も幸せだ
けど」
雪 「幸せ同士、同じだね」
朋樹 「お揃いだな：：指輪、お揃いにするの
どう？」

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

雪 「いいね、それ。ペアリング」

朋樹 「指輪って装飾後付けできるっけ？ 帰

雪 「りにお店行って聞いてみる」

雪 「可愛い彼女とお揃いの指輪にするんで

朋樹 「す、って言ってね？」

朋樹 「恥ずかしいな、それ」

雪 「あ、でも指輪は右手の薬指にはめてね」

朋樹 「右手？ 左手じゃなくて？」

雪 「左手はこの人だけを愛しますって約束

の証だから、左手の薬指につけてたら他

の女の人が寄ってこない。朋樹に好意を

寄せる人がいて、その人と付き合えば幸

せになれるのに、指輪のせいで幸せにな

朋樹 「他の女なんてどうでもいいよ。雪以外

の人と付き合っても、それは幸せじゃないな

雪 「い」

雪 「朋樹、私の理想の結婚年齢覚えてる？」

朋樹 「二十四歳」

雪 「今二十歳からあと四年。四年経っても

朋樹 「悔しいな、俺がプロポーズする予定だ
 け、結婚してください」
 も私を好きで忘れてなかつたら朋樹の負
 し、その人と幸せになつて。でも四年後
 他の人を好きになつたら私との結婚はな
 雪 「でも四年間猶予をあげる。四年以内に
 朋樹 「許すつてへ軽く笑う」
 手の薬指に指輪をはめることを許します」
 ○月○日だけは私と結婚すること、左
 雪 「四年後も朋樹が私の事を好きだったら
 朋樹 「今日つて、○月○日？（上演日）」
 ないでね」
 雪 「逆プロポーズ？ あ、今日の日付忘れ
 朋樹 「それって……」
 すか？」
 指輪を左手の薬指にはめなおしてくれま
 朋樹が私のことを好きでいてくれるなら

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

雪 「だーめ、その日だけ」

朋樹 「毎日でも会いにくるよ」

雪 「でも今日この日付だけ、朋樹は私のも

朋樹 「そうだけど」

の。他に好きな人ができて、私に会い

にきて」

雪 「だーかーら、例えばの話。五年先の未

朋樹 「現れないし、幸せじゃないよ、そんな

合って幸せになっただけだよ」

でしょ、もしたら、五年後その人と付き

雪 「五年後にいい女が現れるかもしれない

朋樹 「どういうこと？」

ことが好き」

の今日、〇月〇日の日付だけ朋樹は私の

雪 「結婚するのは一日だけね。婚約記念日

朋樹 「なに？」

もう一つ」

雪 「負けず嫌い（笑）は……あ、待って！

朋樹 「おやすみ、雪。刻むよ、君が生きたと

いう証を。身体中の細胞に、指に、骨に

深く

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

照明変化（回想終わり）

雪、いなくなる。

朋樹、照明変わっている間に客性から

見えないように右手の薬指に指輪をは

める。

朋樹 「たった数週間前なのにもう、随分と前

のこのように感じる：：できたよ、雪。

案外簡単だった。指輪なんて簡単に作れ

ることができた：：どんなわがままだった

てきつと、叶えてあげることが出来たの

に

朋樹、右手を光にかざす。

朋樹 「まるで昼間に光る星だ。四年後に同じ

ポーズを今度は左手でやっっているのかな。

こうして左手を太陽にかざして、光る指

輪を見ていられるかな。雪がいなくなっ

て一週間、まだ一週間：：温かい、生き

西垣 「ほうー」

雪 「そうしたら心でおいしかったって感じ

る。一週間経って押し花を見て、おいし

かったなっと思っ出す。そのサイクルは

絶対に消えない。朋樹に私の形を残して

もらうんです。決めた、命名「骨刻」

西垣 「こっこ：：？」

雪 「骨を刻むとかいて骨刻、朋樹に託す遺

言の名前。指輪を作るんです、私の骨で。

世界で一つだけ、私の形が残ってる指輪。

その指輪が朋樹の細胞に伝える、私が生

きていた、私が朋樹を愛していた、朋樹

が私を愛していた感情を、心に刻む。そ

して四年後、私達は結婚します！

西垣 「んっ？結婚？」

雪 「神様にお願ひしたんです。朋樹と一緒

に生きていきたいだから、朋樹がまた恋

を始めるのは五年後、四年間は私のこと

を忘れませんようにつて

西垣 「四年くらいなら忘れたりしないだろう

つて、そう思ってる？

雪 「四年ならまだ、朋樹の中の一は私で

いられるかなって

西垣 「大丈夫だよ、四年どころかあいつは一

生、橋口さんを想ってる

雪 「ふふっ、でもそれだと困るんです。朋

樹を好きになる女は嫉妬深いから、新し

い恋が始まらない

西垣 「強いな、橋口さんは。強くていい女だ

雪 「でも嫉妬深いですよ？ そうだ、私、

昼間の星になろう。そう言っておけば朋

樹も私を想って空を見上げるだろうし、

私も朋樹を監視できる。いいそれ、そう

しよう！

西垣 「：：橋口さんって、思ってたより怖い

女だね

雪 「現実を見せつけられて嫌気がさしまし

た？

西垣 「いや、女の子のそんなしたたかな部分

も、三次元も悪くないって思い始めた

雪 「悪くないどころか幸せですよ？ 私 は
 本 当 に 、 幸 せ で し た 」
 朋 樹 が 病 室 に 入 っ て く る 。
 7 の ラ ス ト と 同 じ 演 技 。
 朋 樹 「 西 垣 ！ ま た 来 て た の か 」
 西 垣 「 西 垣 先 生 、 も し く は 西 垣 教 授 だ ろ ？ 」
 朋 樹 「 ど っ ち で も い い だ ろ ？ そ れ よ り 二 人
 き り で …… お 母 さ ん は ？ 」
 西 垣 「 お 母 さ ん っ て 呼 ん で ん だ ？ 」
 朋 樹 と 西 垣 、 徐 々 に 声 小 さ く 。
 照 明 薄 暗 く な り 、 微 笑 ん で い る 雪 に ス
 ポ ッ ト 。
 雪 「 幸 せ で す 、 と っ て も 」
 言 い 争 い を 続 け て い る 朋 樹 と 西 垣 。
 雪 、 二 人 を 見 て 微 笑 む 。
 「 あ り が と う 朋 樹 。 私 の そ ば に い て く れ
 て 、 た く さ ん の 幸 せ を く れ て あ り が と う 」
 暗 転

敏行「こんだけ晴れとつたら、昼間の星がよ
麻子「ふふっ、そうね。一年ぶりのデートだ
敏行「ばっ…：いらんこと言うな！」
麻子「ロマンチックなこと言うんだなあと思
敏行「どした？」
麻子「麻子、じつと敏行を見る。
敏行「一年ぶり、一年越しのデートか」
麻子「朋樹くん、もう少し海にいるって」
以下、朋樹は口パクで喋っている。
朋樹「スマホを下ろして正面を向く。
ろして敏行の方へ向く。
スマホを耳に当てていた麻子、手を下
下手側に敏行と麻子。
スマホに当てて話をしている。
朋樹「右手はポケットに入れ、左手を
る（髪を上げるなど社会人らしい格好
上手にいる朋樹、雰囲気が変わって
波の音、照明は海の色。

く見えるじゃろな」

麻子「雪はまだ、空におるかな？」

敏行「おるじゃろ。朋樹くんが生きている限

麻子「死んだ人は空に還るっていうものね：

：それなら雪と朋樹君は今もずっと、同

じ空の下にいるのね」

敏行「同じ空の下？」

麻子「同じ空でしょ？ 空にいるか陸にいる

かって場所が違うだけで、同じ空の下に

は変わらない」

敏行「：：ロマンチストじゃな」

上手側の照明落ちて麻子と敏行、去る。

朋樹「朋樹、歩いて上手側に行く。から来年

から係長だよ。就職決まらなくて大学院

まで行ったけど、それがよかったのかな。

同期の中でも一番の出世で：

待って、電話だ」

下手側の照明つく、大輔と奈々が来る

画面を押し出すと同時に上手側の照明落ち
 大輔 「はいはい、ごめんなさいね」
 朋樹、煩そうにスマホから耳を離して
 大輔 「は、ごめん、また後でかけ
 直：大輔！」
 奈々 「行くからさあ」
 大輔 「よかったでちゅねー、ママがおむつ替
 え変わったくれるって。あ、ともきいー
 （大声）命日には俺らも雪ちゃんに会い
 任せるって言ったんでしょ！」
 大輔 「ご両親に挨拶して、今は海に：：って、
 それより先におむつ：：もー、あんたが
 大輔 「朋樹もう雪ちゃんの実家着いたって？」
 奈々 「ご両親に挨拶して、今は海に：：って、
 ……大輔あんたそれ、漏れてるわよ！」
 向かってー電話してるんだから向こうで
 うって言いたくて：：ちよつとへ大輔に
 事な日に。でも、私たちも雪におめでと大
 奈々 「もしもし、ごめんね。婚約記念日の大
 子どものおむつ替えをする大輔。横で、
 スマホを耳に当てている奈々の横で、
 『骨刻 -コツコク-』七種夏生

朋樹「聞こえた？相変わらずだよな、あの
朋樹、上手側に歩いていく。

二人。そういえば産まれたあの報告してな
かったつけ？去年の命日、つわりで新
幹線乗れないって話してただろ？あの
時お腹にいた子だよ。そうだ、ついでに
もう一人、電話してみようか」

朋樹、電話をかける。
電話の着信音と同時に下手側の照明つ
く。簡素な机、丸椅子に座る西垣、ス
マホを耳に当てる。
西垣「もしもし、聞こえてるよ。なんだよ、

二人きりの方がいいかと思っ
て電話しな
かったんだよ。もしかして橋口さん寂し
がってる？やっぱ俺がい
ないよ。その
冗談だよ、忙しいからもう切るぞ。その
前に婚約記念日おめでとう、お二人さん

西垣がスマホから耳を離す、同時に
下手側の照明落ちる。西垣去る。

雪 「最後まで一緒に生きてくれた」
 朋樹 「決して忘れない」
 雪 「深く、深く刻む」
 朋樹 「指に、腕に、心臓に、身体中の細胞に」
 雪 「私が生きていたという証を」
 ださ「い」
 つ、俺は逃げません。一つ、安心してく
 一つ、俺には本音を言ってください。一
 朋樹 「一つ、俺のことを頼りにしてください。
 雪、朋樹のそばに歩み寄る。
 中央で立ち止まり空を見上げる朋樹。
 人間を心のどこかに刻み付けて」
 生を過ごしてる。それぞれに、雪という
 朋樹 「みんなちゃんと生きてるよ、自分の人
 朋樹、ゆっくりと舞台を歩く。
 たころのままだ」
 変わったこともあるけどみんな、雪のい
 ころのままだ：：変わったものもあるし
 朋樹 「変わってないだろ、みんな。雪がいた
 朋樹、正面を向いて、

朋 樹 「お父さんとお母さんに挨拶して、新幹
 線に乗って家に帰ってご飯食べて、朝
 雪 「これからどうする？」
 朋 樹 「どっちも。どっちも正解（微笑んで）」
 雪 「ふふっ、どっち？」
 朋 樹 「するし長かった気もする」
 雪 「あっという間だった？」
 朋 樹 「どうだろう、あっという間だった気も
 雪 「十周年かぁ」
 朋 樹 「一年ぶり、十回目の婚約記念日」
 朋 樹 「ただいま、雪」
 雪 「おかえり、朋樹」
 とお揃いの指輪。
 雪、左手を空に掲げる。薬指には朋樹
 たのことを照らします」
 眠ります。先に空で輝いています、あな
 樹は逃げません。一つ、だから安心して朋
 つ、朋樹には本音を言います。一つ、朋
 「一つ、朋樹のことを頼りにします。一

て約束覚えてる？」

朋樹 「婚約記念日、今日だけ俺は雪のものつ

雪 「いい人捕まえたなあ、私！」

朋樹 「大好きだよ。雪なら許せる、大好きだよ。」

雪 「わがままな女は？」

朋樹 「自分で言ったくせに、わがままだなあ。」

雪 「あんなに雪だけ言ってたのに、別

朋樹 「ちゃんと言わないとな。」

雪 「怒られちゃうよ？」

朋樹 「うん、内緒。」

雪 「呪いはしないけど嫉妬はする。彼女に

朋樹 「雪、今日じゃない日に俺が結婚したら

雪 「よかった。」

雪 「幸せだから。」

朋樹 「でも苦しくないよ。雪に会えた今日が

雪 「ハードだねえ。」

雪 「きて仕事に行く。」

朋 樹 「それはまるで骨のよう、普段は見えない
 いけれど中枢を担っている。感情が砕け
 て全ての細胞に繋がって、心に強い想い
 を刻む。その証は今も、数年経った今で
 もまだ輝いて、心の中に刻まれている。

朋 樹 「雪：：雪、大好き！大好き！」
 朋 樹、涙を拭って踵を返し歩く。
 振り返った朋樹、雪のいた方を見て、
 叫んですぐ、走って舞台から去る。

雪 「朋樹！朋樹大好き！」
 雪、朋樹の背中に向かって、
 歩き出す朋樹。

朋 樹 「いってきます、雪」
 雪 「いってらっしゃい、朋樹」
 朋 樹 「一年後、また来るよ」
 雪 「ダメ。今日帰ったら、明日からの朋樹
 は大人の朋樹だから」
 朋 樹 「残っちゃおうか？」
 やう？」

雪 「朋樹、そろそろ日が暮れるよ。行っ
 ち

敏行「のる西垣「ら？」
 大輔と奈々、舞台に来る。お祖父様ですか？」
 「西垣を睨む」
 「あいつらはたまに突拍子もないことす
 ら？」
 「話があるから来てくれって。なにかし
 呼ばれたんですか？」
 「お母様！お久しぶりです。お母様も
 反対から西垣がやってくる。」
 「も！あら、西垣先生」
 敏行「持病の腰がいとうて」
 「敏行、腰を押さえている。」
 「反対方向から麻子と敏行が歩いてくる。」
 「朋樹、舞台から去る。」
 「って本当は：：」
 「いた証を確認している。俺だって、俺だ
 生まれ育った町で、海で、彼女が生きて
 一年に一度、結婚を約束した日、彼女の

『骨刻 -コツコク-』七種夏生

大輔 「西垣じゃん、久しぶり！」

西垣 「俺、教授だからね。先生をつけよう

か？ 敬語もね」

奈々 「なにこのメンツ。大事な話があるから

つて言われて来たけど」

朋樹 「ごめん、お待たせ！」

朋樹と雪、やってくる。

麻子 「二人とも、話つてなに？」

朋樹 「えっ、お母さん？ お父さんまで。

(雪を見て) えっ？」

雪 「呼んだよ。だって大切な話でしょ？」

朋樹 「俺の両親呼んでない？」

雪 「だと思った。もし、相変わらず朋樹は」

朋樹 「いててて、つねらないで」

奈々 「はいはい、いちやつかない！ で、話

つてなに？」

朋樹 「俺たち、結婚します」

全員 「：：え？」

雪 「四年前の今日、約束してたの。四年後

も朋樹が私のことを好きでいてくれたら

結婚しようって」
奈々「えー、おめでとう！」
大輔「なんだそんな話か。いつか結婚すると
思ってたよ、見せつけんなって」
敏行「雪が：：雪が：：小僧、あの山の頂上
まで勝負じゃ！」
麻子「お父さん、そんなに走ると腰が：：お
父さん！」
西垣「橋口さん！お祖父様が！」
麻子「先生、この人、雪のお父さんです」
西垣「：：安心してください、お父様。俺、
こう見えて教授なんです」
敏行「なん：：」
奈々「（かぶせる形で）教授いま関係なくな
い？」
大輔「えっ、西垣って教授だったわけ？」
雪「もー！みんな、西垣先生のこと酷く
言わないで！」
敏行を抱えるようにして、舞台から去
る朋樹以外のメンバー。

朋樹 「俺だって、そんな未来を想像してた。

これからも一年に一度そんな叶わない未

来を想像して、ふと現実に戻ったり、ま

た想像したり。そうして生きていくのか

な。指に、腕に心臓に、体中の細胞に骨

に、君の存在を刻んで。そのサイクルを

繰り返す。だから絶対に、忘れたりしな

い」

雪、戻ってきて朋樹の隣に立つ。

雪 「これは私の遺言の物語」

朋樹 「骨刻」

雪 「忘れないでね、私が生きていたという

朋樹 「大丈夫、もし忘れそうなくても形が残

ってる」

雪 「心に、身体に、指に、骨に」

朋樹 「心と形の両方に、君が生きていたとい

う証を」

雪 「深く、深く刻んで」

朋樹 「これからも一緒に」

雪 「生きていく」
朋 樹 「そんな未来を描く」
雪 「ありえないお話を」
朋 樹 「一年に一度、今日という日だけ」
雪 「私達が一緒に生きれる〇月〇日、今日
この時間」
朋 樹 「最後までお付き合い合いただき」
朋 樹 ・雪 「ありがとうございますございました」

— 終 —